



TITLE:

<批評・紹介>岡本さえ著「清代禁書の研究」

AUTHOR(S):

森, 紀子

---

CITATION:

森, 紀子. <批評・紹介>岡本さえ著「清代禁書の研究」. 東洋史研究  
1998, 57(1): 149-156

ISSUE DATE:

1998-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155164>

RIGHT:

## 批評・紹介

岡本さえ著

### 清代禁書の研究

森 紀子

本書は清代の禁書、とりわけ乾隆時代の方がかりな禁書政策によって、禁書とされたおびただしい作品群とその著者たちに視点を置き、文化的な観点から明末清初期の時代精神の分析を試みた意欲的な論作である。岡本氏にはすでに「貳臣論」（『東洋文化研究所紀要』六八）「清代禁書―その著者たちの思考(出所)」(『東洋文化研究所紀要』七三、一一二)「乾隆禁書―著者たちのプロフィール(1)(2)」(『東洋文化研究所紀要』一一五、一二四)「修國器と清初の江南」(『東洋文化研究所紀要』一〇六)など一連の禁書関係の論考があるが、本書はそのような長年にわたる氏の研究活動を集大成したものといえよう。

さて、本書は清朝の禁書政策そのものを論考の対象としたものではない。氏は明確な文化批判の立場から本書を構想されているのであるが、その対象とするところはなかなか網羅的である。そこで最初に氏の問題意識を押さえ、論考の枠組みを整理していきたい。

まず大きく提起されるのは、中華世界の十七世紀と十八世紀にみられる知的環境の不連続性は何によって想定される十七世紀(明末清初)の知

的環境とは、活潑な異端論争に象徴されるような時代、もはや既存の儒教ではカバーできない學的分野の廣がりをも、異端、異教をバネに模索しようとした、まれにみる合理的思考の時代、實學を生み出した時代のことである。それに對して十八世紀(乾隆期)中華世界の知的環境とは、ヨーロッパ宣教師の描寫を借りれば、文人の關心事は商賈と官職のみ、勉學は科擧通過のみ、自然科學には無關心で、精神生活は星占いに支配されるものであったという。

ところで、かかる知的環境の不連続性を問うことは、換言すれば、清代の學問はなぜ考證學のみが榮えたのか、という往年の問題意識に連なるものである。清代とは「文獻學ばかりで哲學を持たない時代、實事求是が文獻考證ばかりに發揮せられて政治的社會的な實學書の傑作を持たなかった時代」であり、「文化の形としては哲學、文獻學、掌故の學、實學などが並立していた明代の方が」「いかに難で、洗練をかけたものであろうとも、むしろ健全な時代であったと考えざるを得ない」という島田虔次氏の持論を岡本氏は大前提とする。そしてこの奇形的な文化狀況を招來した要因として「彈壓による士大夫の萎縮」を否定することは到底できないという島田氏のことを援用することによって、本書の課題は一層はつきりさせられる。奔放自由な明末の學風に對して萎縮退嬰と精緻が背中合わせになった清代の學風。ここに、清朝の文人に對する不寛容と残酷な刑罰をともしその思想政策、すなわち文字獄と禁書は清代文化の全體像、時代精神を窺うためにも避けてはとおれない問題であり、その禁書作品から明末清初の思想界を逆照射しようというのである。

岡本氏のこのような問題意識を念頭に置いた上で、具體的に本論

に立ち入って紹介、論評していこう。本書は大きく四部に分かれて構成されている。

## 第一部 清代文字獄と乾隆禁書

### 第一章 文字獄と禁書の目的と特色

#### 第二章 文字獄から禁書まで

#### 第三章 禁書に對する清朝の態度

最初に岡本氏は、文字獄と禁書の一般的考察を試みた上で、その思想統制政策としての特色と目的にせまろうとする。

時期的に見て、反清活動が南方でなお盛んであった順治年間は一、一般文人の文筆活動にまで立ち入った取り締まりなど不可能であった。生員の結黨を牽制する法や淫祠邪教の取り締まりは見られるものの、康熙二年の明史案、五十年の南山集案を除けば、順治、康熙年間には比較的文字獄は少なかったとされる。ところが、下って雍正期に至るや、その十三年間だけで明一代を超える件数の文字獄が生じ、乾隆期では三十九年以降に『四庫全書』の編纂に伴って、過酷な文字獄（七年間で五十件に上る）が展開され、同時に數次にわたる禁書令が出される。

しかしながら、事件の實際にふみこみ、禁止された書籍の内容にふれたとき、それらが彈壓禁止にいたった理由というものに氏は割り切れなさを感じていく。すなわち、文字獄について言えば、對象となる人間をまず設定し、そののち口實を設けて極刑を科すという偶發性が見られるわけで、ここに氏は文字獄の特性として①重刑、②權力鬭争、③反逆と見なす難癖、④保守派漢人の告訴、という四點をあげる。また、禁書について言えば、そのシステムティックで

大規模な統制が、異端も正統も、政治的な立場も、學的分野も乗り越えて、あまりにも廣範に及んでいることが目をひく。清朝はいったい何を禁じたかったのか、やはり齒切れの悪さがつきまとうと氏は言う。

とはいえ、清朝も一應の禁書の基準を作つてはいる。一、入關以前の滿人に關わる字を含む書、二、西北、邊外、部落等の記載の書、三、南明の年號記載書、四、特定文人の自著・贈詩、五、禁書掲載の奏疏、六、遼、金、元を敵視した書等である。それでは實際に、個々の禁書の事例について清朝はどのような禁燬理由を附したのであろうか。

姚觀元編『清代禁燬書目・清代禁書知見錄』によって岡本氏が整理したところによると、最も頻繁に現れるのは、本人あるいはその子孫をも含め、何らかの形で文字獄に巻き込まれた特定の文人（錢謙益等十一人）の名を理由としたものである。次いで、民族王朝の危機や民族英雄（岳飛等）をテーマにした作品に見られる夷狄に關する忌詞を理由とするもの、そして、ジャンルのには野史（明末の史書）、軍事・邊防を論じたもの、黨争・科學の記録、思想・文學書と續いていくが、これらのいずれの場合でも、多くは「失實」「悖妄」「觸犯」等の簡單な決まり文句が理由として提示されるだけで終わり、書物の内容にまで立ち入って説明されることはない。のみならず、かかる簡單な理由すら附されず、ただ書名のみリストアップされているものが實に多く、その中には生活に直結した實用書、類書までが多數含まれている。理由もはっきりとさせないまま、かく多數の書が禁燬された眞の理由はどこにあるのか、單なることは狩ではなく、禁書の内容からその疑問に迫ることが岡本氏の次の作

業となる。

## 第二部 「乾隆禁書」の作品内容

### 第一章 禁書のジャンル

### 第二章 中華の富強

### 第三章 夷狄論

### 第四章 學問の省察

第二部では、禁書とされた作品群に現れるモチーフを集めることにより、そこに追究されていたテーマ、すなわち禁書が包含していた基本的な内容が何であったのかを明確にし、禁書政策によって失われようとした文化遺産に注目する。このモチーフは大きく二つにまとめられている。富國強兵を圖るものと、夷狄に關するものである。

すなわち、十六世紀後半より、北邊の將來を憂慮する一部の人士は、明軍の實力低下を問題視し始めた。徐光啓やその高弟孫元化に代表されるこれら士人の主張は、滿人の軍備擴張に對抗して西洋の火器を採用し守城に徹するというものであった。彼らは天主教との関わりも深く、火器に習熟し、マカオのポルトガル人から西洋火砲を大量に購入しようとする動きも見せた。軍事力強化と産業の充實を説き、明朝の復興を圖ろうとしたこれらの人士を、岡本氏は實務派、實學派と分類する。

そもそも、明末清初期は「實」という字を文人が多用了した時代でもあるが、何を實學というのか、その概念規定はなかなか困難である。陽明心學に反對して朱子の理學を「實」とするものもあれば、科學試の理學を「虛」とするものもある。あるいは宋明理學一

般を虛學とし、經世致用の學を實學とすることもあるが、今日では、明末清初の實學思潮は、理學・心學と複雑な繼承關係をもつと考えられている。そこで岡本氏は實學を定義して、自身の中で「實」を模索する學問的態度、合理的時代精神とする。そして十六世紀後半になるとこの實學の内容は産業や政治に結びつく實用の學問となり、「技術」「技藝」が脚光を浴びるようになったという。

「富國強兵」「民生日用」の實學精神は「西器」「西學」を積極的に取り入れ、ここに豊富な實用書、西學漢譯書が集中的に刊行されたのであり、それらがまた、乾隆禁書の對象となったとされる。この明末の實學、西學の世界を描き出すことは、本書の重要な作業の一つである。それは、ついに中國近代に持ち越されることなく失われようとした文化遺産を再構築してみようという氏の意志でもあるからだ。しかし、それだけにこは、後で指摘するように、問題も含まれる箇所といえよう。

さて、禁書に見られるもう一つの重要テーマは夷狄論である。氏は北邊の緊張とともに變遷していく人々の對夷狄意識をたどると同時に、清朝側の自意識の變化をもたどっていく。

宋代以來、傳統的な夷狄對策は、邊境防備より内政を充實させることにあったが、明朝の儒官は首都陷落直前までこのような傳統思考から抜け出せず、滿州族の實力把握に缺けていた。ここに儒官と實學派との乖離が見られる。前述のように、明末の宣教師の出現に對し好意的であった士人は、西學に興味を持ち翻譯書を多數出版していた。それ故、東南アジアにおける遠西夷（ヨーロッパ人）の動勢は比較的良好に知られていたのである。だが、滿州夷に對しては、十六世紀末にあつて警戒感を持ち得たのは一部の技術派官僚にすぎ

ず、大部分の人士は問題にもしていなかった。撫順陷落（一六一九年）以後やっと、不気味な虜奴として恐怖感を持ちだすのである。入關後の清朝に對しては、明の遺臣は當然ながら「中華」と認めず、とはいえ否定できぬその存在を「外國」とみなす。また、清に屈した貳臣は、明期時代の自らの滿人觀を押し隠し、「大清」と讀え明朝を「先朝」と呼ぶ。

一方、ヌルハチは中原征服を決意して以來、滿州族を「大金の裔」明朝を「南朝」と見なす。雍正帝も『大義覺迷錄』で、清朝が外國出身であること、鄰國から中華の主となったことを認める。その上で朱元璋を竊奪者とし、華夷の別を論駁したのである。それに對して、生まれながらに中華を自認する乾隆帝にあっては、自らを「外國の君」とする雍正帝の『大義覺迷錄』は禁書とせざるを得なかった。このように國初以來の清朝皇帝の夷狄觀の變遷を見れば、そこには華夷秩序の中で自己の正統性を表明せざるを得ない征服王朝の苦澁とともに、雍正・乾隆期に至って文字獄の激しくなる事情の一端が窺えそうだ。本書では直接の論點とされなかったが、取り締まる側の論理としてなかなか示唆的なものがある。

### 第三部 禁書の著者たち

#### 第一章 實務派・實學派士人

#### 第二章 遺臣と遺民

#### 第三章 明清の文人

第三部は、貳臣、遺臣遺民、漢臣というその政治的立場によって、禁書の作者達を類型化しつつ、その實像に迫ろうとするものである。實に多數の人物がその著書とともに紹介されているのである

が、氏の主たる關心はここでも實務派・實學派士人に向けられ、中でも明清兩朝に仕えた貳臣が注目される。

まず、明代の實學派士人として、徐光啓、李之藻、韓霖、袁崇煥、孫承宗等があげられる。彼等が國土防衛、滿州族打倒の大目的をもって努力したことは前述のとおりであるが、清代の實學派となると、もはや強兵の目的は空しく、その努力は民生日用に向けられることになる。この實學派は、清朝との關わりかたから遺民と貳臣・漢臣の二派に分けられるが、互いの親近感保たれていたという。遺民の實學派としては、陸世儀、孫奇逢、方中履（方以智の息子）、薛鳳祚、梅文鼎等が紹介される。西學の測地法を取り入れたり、天文、曆法への關心をもつなど、彼等と西學との關わりは深い。

さて、禁書とされた作者の多くは文官貳臣であった。貳臣はまず「牽衆投降」した武官から出現している。文官貳臣の出現はそれより遅く、一六三〇年代でいえば、武官貳臣は既に滿州族の軍事顧問となっているが、文官貳臣はこの時期、まだ明朝の官吏として都市防衛に當たっているという皮肉な現象が見られた。例えば龔鼎孳は一六三七年、知縣として流賊に對抗するため、火器使用、民兵訓練の自衛策を講じている。

そもそも文官貳臣は、明代において既に文才が響いており、それ故に清朝高官として迎えられた人々であるが、明朝時代の反滿の言辭は常に汚點として見なされることになる。貳臣は國內の鎮靜化、清朝の正統性を示威する官選本（『明史』『大清律令』等）の編纂に働くが、その中で王弘祚の『賦役全書』も乾隆禁書になったと氏はいう。このように行政官として軍事技術、天文、度數の學等に關

心を持つ彼ら文官貳臣は、當然、西學にも積極的に接していた。貳臣の周亮工はマテオリッチと徐光啓の曆學を萬曆文化の頂點としてゐる。實學の中でも天文學は清朝にあつても活動しやすい分野であつたのだ。ヨーロッパの宣教師は明朝同様、欽天監として優遇されている。彼らも一種の貳臣と言えよう。

一方で貳臣は、清朝の對漢人政策をチェックする働きもする。龔鼎孳は「慎刑七條疏」を上奏し恐怖政治を防ごうとした。とりわけ江南の文人にとって苛酷な「北邊流徙」を戒めたのである。あるいは王永吉のように江南に對する過酷な徵稅への抗議もあつた。そこで岡本氏はこう總括する。「貳臣は明朝を早くに見限つた漢人であるが、明代士人の生き方を公然と清朝に持ち込んだ士人グループといえる」と。すなわち、十七世紀中葉に活躍した文官貳臣は、清朝官吏でありながら滿人權力を絕對視しない精神的餘裕と果敢な諫言をしうる批判精神の故に、清朝から警戒され、原官のまま處罰されたのである。こうして、明末實務派の精神は文官貳臣に、そして漢臣にと繼承されていく。ただ、この漢臣も、節を汚したという批判こそないものの、絶えず自己規制を餘儀なくされる。明朝文化の中で育つた彼らは貳臣とも交流があり、湯斌、魏裔介、李光地らは禁書とされることはなかったが、明史編纂に苦勞している。また王士禛の大量の隨筆作品は違礙書目に入れられている。

これと對照的なのが、左光先、艾南英、劉宗周、黃道周、倪元璐等、同じく禁書とされた明朝の儒官達である。彼等は夷狄支配に對して徹底抗戰を主張し、人望もあつたが、北邊防備や流賊壓制という實戰の體驗に乏しく、狀況把握に遲れていた。湯若望の大砲製造に反對したり、天主教を邪教と見なすなど西學には批判的で、保甲

を基礎とした徳育の保守、治安維持に熱心であつた。夷狄に對する中華防衛には、國內政治安定が第一義という古代以來の儒家の信念に搖らぎはなかつたのである。その中で、遺民の大儒、黃宗羲、王夫之、顧炎武等は明末清初の實驗、實測を重視する流れを受け、知行併用ということで、格物致知の内容に新視點を加えている。また激動期にあつて、王朝の興亡を天心と受け止めなお才を盡くす、天心と人心の一氣貫通という彼等の主張は、貳臣、漢臣にも共通の行動規範であり、これが清初における漢文化の荒廢を救つたとされる。そしてまた、この天心と人心の一氣貫通という發想こそ、ヨーロッパの宣教師達にとつては理解不能な點であつた。

その他、反清活動こそせぬものの、富貴利達を輕蔑し、隱逸の處士として、冷靜に社會を靜觀した李清、談遷、吳嘉紀、周容等がいる。彼等は王朝交代の動亂の中で滅亡、飢え、病、死を擬視し詩に記した。明末を知る讀書人としての懷舊の情、漢文學の素養への誇り、かような個人の情を含む詩集にすら乾隆禁書の網は掛けられていたのである。

そして最後に、突發的政治事件であつた順治、康熙の文字獄の犠牲者（科場案の吳兆騫、順治帝の怒りを買つた季開生、南山案の戴名世、『字貫』の王錫侯等）及び乾隆禁書の中心人物である錢謙益（貳臣）、屈大均（遺民）、呂留良（理學）を紹介して第三部は締めくくられる。彼等は死後半世紀以上もたつてから、乾隆禁書においてその書を徹底的に取り締まれた人物である。錢謙益に至つては、死後一世紀もたつてから乾隆帝の不興を買うことになつたのだが、それは清朝の臣僕でありながら前明を慕い、清を敵視した詩文を残したことによる。つまりは前明時代の作品が汚點とされたわけ

で、これは文官貳臣の誰もが抱えていた危険性であった。遺民の屈大均は民族文化保持の姿勢をシンボリックに表現し、朱子學者呂留良は古典解釋の場を借りて夷狄論を展開し、民族意識を強烈に表現していた。彼はまた知的關心の幅廣い、實學派というべき學者でもあったわけで、すなわち、この三者は岡本氏が大別した禁書著者の類型のそれぞれを代表するものであった。

#### 第四部 清代社會と「乾隆禁書」

##### 第一章 消えた思想——浙江巡撫修國器の場合

##### 第二章 清代學術における禁書の役割

##### 第三章 清代社會の特色と近代への道

第四部では、従来、史書に文字獄、禁書事件として擧げられてこなかったが、しかし、そのプレタイプともいえるべき事件をピックアップすることによって、文字獄、禁書政策の本質により深く迫ろうとする。岡本氏はその要というべき位置に、浙江巡撫修國器という興味深いキャラクターを据える。彼は滿人出身の清朝官僚であるが、しかし嚴密に言えばその出身は滿漢のダブルであり、貳臣に近い存在である。またそれ故に、江南の多くの漢人文人たちと交際があり、彼らと同質のメンタリティーを持った人物であった。

すでに本書の第一部で、貳臣文官の陳名夏、陳之遴が結黨營私を名目に順治帝に處斷された事件が取り上げられているが、岡本氏はこれを「記録されない文字獄」「文字獄の幕開け」とする。事件當時、浙江巡撫修國器は、陳之遴の老母を北京に護送する命令を怠ったかどで逮捕連行された。彼は陳之遴の姻戚でもあったのだ。その先、鳴綠江の支流から遼陽に進出してきた彼の一族は、明朝の軍人

として世襲職を獲得していた。ヌルハチが明領を攻略し始めると一族の中には滿軍に降るものも現れ、彼の父も滿人のスパイとして彈劾され自殺する。彼は母とともに明朝滅亡まで江南に居住していたが、南下してきた清軍に迎えられ、その先驅けとして働くこととなる。彼が對決した相手は鄭成功であった。鄭成功との攻防戰、鄭芝龍失脚への働きとともに、地方官としての彼は、イエズス會士や地方文人の庇護者でもあって、江南の貳臣達と詩文のネットワークで結ばれていた。

やがて康熙初頭、楊光先事件が起こった。岡本氏はこれを「記録されない禁書」とする。修國器はこの事件に關しても北京に喚問される。周知のように、この事件は西洋曆の導入、天主教の布教に反對したものであるが、明代から積み上げられてきた西學への大きな打撃ともなった。事件後、西學関連書は激減し、中西の知的交流は先細りとなってしまった。楊光先が告發した『天學傳概』に序を書いていたのが、徐光啓を曾祖父とする許之漸であり、楊光先の攻撃は明代の西學派士人にも及んだ。許之漸、修國器は多年にわたって教堂建立に協力してきた士大夫として、天主教との關わりを問題視されたのである。修國器は明代の西學支持者のように、富國強兵のための技術的關心から宣教師にアプローチしたわけではなかった。むしろ天主教を教えとして認め、佛、道には批判的であり、とりわけ福建の山岳地方の彌勒信仰集團は地方官として徹底的に彈壓している。しかし喚問以後、彼は宣教師たちとの關わりを全て斷つ。實にこれは明末以來活潑であった中國の異文化受容を阻止するという後遺症をもたらした事件でもあったとされる。

このように修國器が出會った二つの事件は、個人的な筆禍事件に

納まらぬ廣範な要素と影響をもった事件であるが、しかし、第一部で挙げられた文字獄の四つの特徴點をことごとく備えた典型的な事件であった。思想の多様性を許容し得た明朝の、とりわけ江南の文人達は、遺民、貳臣、漢臣というその政治的、思想的立場を越えて自由な詩文の交流をしていた。清朝の下でなお形成されていた漢人の自由な發言のネットワーク、これこそが滿人にとつての大きな脅威であつた。してみれば、漢人最高の知識人である貳臣のネットワークを計畫的に破壊することこそが文字獄の眼目であり、その原型はすでに順治時代に出來上がり、以後の政策を規定したとされる。個人的な讀後感をいえば、この第四部の對象人物が個性的であり、明末清初の一側面として最も興味深かつた。

以上、評者の關心によつて刈り込まれたところも多々あるが、大づかみに本書の論旨を追つてみた。

さて、從來、華夷變態の明末清初といへば、遺民遺臣の存在が目されてきた。しかし、本書によれば、遺民遺臣は、時代の現實を把握し得ぬアナクロであり、體制から身を引いているだけに影響力も少なく、征服王朝の恐れる相手ではなかつた。むしろ新體制の中に場を占め、江南明人文化の傳統、人脈をもちこもうとした貳臣こそ、警戒されるべき存在として文字獄、禁書の大きなターゲットとされていったという。このような貳臣の存在をそれなりの説得性をもつて描きだしたところは、岡本氏の卓見といえよう。

そして有能な行政官としての貳臣を支えていたものが、禁書政策によつて失われようとした明末以來の實學、西學の遺産であつたとされるのだが、ここで評者が戸惑いを禁じ得ないのは、岡本氏が禁書とされた、明末の實學を代表する『農政全書』『天工開物』『遠

西奇器圖說錄最』等の書物が、禁燬書目に見いだせないことである。本書に引かれた禁燬書目は『清代禁書總目（補遺・清代禁書知見錄』であるが、評者の見る限り、この書目にそれらの書名はあがつてこなかつた。氏の挙げられた西學關係書の多くもこの書目にはあがつてこない。氏が何によつてこれらの書を禁書と判斷されたのか、その説明が一切なく、曖昧なのである。

冒頭で言及した岡本氏の先行の論文の中では、大量に紹介される書名の一つ一つに禁書かどうか、どの禁書書目に挙げられているか、丁寧な注記がされていて、我々は確認しながら論考に接することができた。しかし、本書では、禁燬書目自體の説明も省略されているし、煩雜と思われたのか注記も全て削除された。代わりに卷末の別表に一括されているのだが、前作では禁書とされていなかった『西法神機』『明朝破邪宗』『竹窓隨筆』等も根據を示さずに禁書と分類されている。岡本氏が、禁書政策による文化の斷絶という構圖をもつて立論されるのであれば、まずは考察の對象とされる作品群が、確かに禁書としてリストアップされているという確認がほしいのである。その點が混亂してくると、氏が再現されようとする禁書の世界そのものがぼやけてしまう。

いま『天工開物』を例にしてみれば、確かに該書は崇禎年間に刊行されて以後、中國では忘れられた存在となり、清末に至つて日本留學生に持ち歸られ、やつと本國でも高い評價を受けるようになったといわれている。對照的に日本では、貝原益軒等によつて紹介されてから、知識人たちに大いにもてはやされていたのである。しかし、禁燬書目にあがつてこなければ、本國におけるこの書の斷絶を、禁書だったからだとする直接的な根據はないことになる。むしろ、



中國の傳統的知識人の興味を引かなかつたからだともいえるのである。評者の知るところで、この書物と禁書との関係が見られるのは、禁書とされた方以智の『物理小識』巻七に、この書の鎖物に関する記述が引用されていることである（戴内清「天工開物について」『天工開物の研究』所收参照）。

ただ、傳統中國の知識人と科學的認識という點から言えば、岡本氏自身も、本書の中で明代の實學派、西學派に一貫して高い評價を與えるものの、彼らが、時代の政治勢力としては、アウトサイダーであつたこと、清代に入つて以後、西學に否定的な空氣が強まつて行くのも、文人の世論にその下地がすでに現れていて、あながち、清朝の彈壓ばかりとは言えないという認識をされている（五二〇頁）ことは、念のために申し添えておく。

そして、禁書政策自體もどれほど末端まで徹底して實施されていたのか、現存禁書書目が制作できるほどであるのだから、書物の斷絶や、文化の斷絶をどれほどまで主張できるのか、そのバランスを見極めることは岡本氏ならずともなかなか難しいものがあるう。しかし、見せしめとしての文字獄の苛烈さ、士大夫の萎縮や、相互監視を誘う重苦しい空氣というものは、本書からもよく感得できた。

何よりも、氏が割り切れなさ、齒切れの惡さと表現された、言論統制政策の不透明さ、處斷される側には理由のわからぬ恣意性、對處の仕様の無い偶發性といったものにこそ、人々を疑心暗鬼の恐怖に陥れる專制體制の老練さがあつたのではなからうか。そういう意味でも、禁書政策の當局者の歴史は本書の當面の關心事とはされなかつたのであるが、後學のために、禁書書目の成り立ちかた、禁書指定の作業のあらましなど、いささかなりとも説明いただければよ

り興味深かつたと思う。

また、清朝が破壊しようとした江南文人のネットワークとは、結局、どのような社會的實態をもつたものであつたのか、倭國器が卷き添えにされたような清初の文字獄について言えば、氏の描寫でそれなりに實感できたが、作者の死後、半世紀以上も経ってから發動された乾隆禁書ということになると、觀念として理解できても、今一つ存在感が讀み取れない。かつて存在したものの記憶まで抹消したいということであつたのか、それとも乾隆のその時期になお何らかの社會的存在としてあつたのか、ここでもやはり當局側の論理と事情がもう少し説明されないと、それが眞のターゲットであつたのか、それとも結果的に統制の網を被つてしまつたものだったのか、模糊としたものがどうしても残るのである。

参照された文獻の豊富さといい、漢籍史料に恵まれた環境にある氏ならではの勞作といえよう。ただ、大量の史料を扱う上でのやむを得ぬ疎漏かもしれぬが、ワープロの變換ミスとおぼしき誤植がいささか多すぎることで、引用文の解釋には同意できない點がかなり見られたこと、巻末の現存書目もどこに現存されているのか言及がないのは不親切であることを最後に指摘して筆を置きたい。

一九九六年二月 東京 東京大學出版會

A四 七三四+四六頁 二八八四〇圓